

京都から世界を広げて～私の提案～

周悦

「先生、この名前なんて読むん？」と5年生のA君が友達の名前の漢字を書いて、その中国語の読み方を聞きたいと頼んできた。「これはね～」と私が発音をすると、「ははははは～！」と大爆笑。「じゃあ、これはこれは？」とB君もまた別の名前を書き、その中国語の発音を聞いては、二人とも再び爆笑。「え～じゃあ、これはこれは？」。。。二人はそのゲームにはまり、時間さえ忘れそうになった。帰りの際に、「先生、『さようなら』は中国語でなんて言うん？」と二人に聞かれた私は、何回もゆっくりと発音して聴かせたら、二人も小声で何回も練習しながら玄関に向かった。そして、とてもきれいな発音で「再見！」と言い、手を振りながら歩き出した。「やべー、中国語面白くね？」、「めっちゃ面白い！」という二人のつぶやきに、私は思わずくすっと笑ってしまった。

それは自宅で開講している英会話教室での出来事だった。生徒は私が日本人ではないことを知ってはいたものの、普段は英語か日本語しか話さない私のことをすっかり「普通」の先生として接してくれていた。彼らに中国語を聴かせたことで、目の前にいるのは「外国人」であると再認識し、初めて中国に興味を持ったようだ。

またある日のこと、3年生のレッスンで生徒が世界地図の前に立ち、ロシアやアメリカ、日本などの国を探しながら、英語で国名を言っていく。中国を見つけた時、先生はここ出身だよと教えて、目を丸くしたT君が「え！？そうなの？」と驚いて、「何で日本語喋れるの？」「何で英語も喋れるの？」、「先生は何の言葉を喋ってたの？」と、質問の連続だった。

私は4年前に京都での研究生生活を終えた後、夫の仕事の関係で亀岡市に移住した。発達心理学の研究歴を活かして、地元の子どもたちに、外国語を習い、外国の文化を知る楽しさを伝えたい一心で、英会話教室を開講した。しかし、私の教室に通っているほとんどの生徒は日本以外の世界をまったく想像できない。教室の世界地図を眺めて、初めて日本がどれほど小さいかに気づく。3年生以上になると学校でも英語活動が始まり、英語圏のネイティブ講師が年数回の頻度で授業に来てくれるようだが、何か面白い話を聞いたかと尋ねると「Yellow shirt～ Yellow shirt～」の歌しか印象に残らないそうだ。英語を習う理由も、将来英語は必要だろうという親からの教え以外は、何も考えていない生徒が多い。ましてや、異文化を知りたいという動機を持つ生徒に、私はまだ出会っていない。

それもそうだ。亀岡では外国人を見かけることは滅多にない。振り返ってみれば、その点については私の実家も同じで、私自身も最初から外国の文化に興味があったわけではない。高校生までは、ただ中国語以外の言葉を話してみたいという好奇心で英語を一生懸命勉強していたが、中国以外の国のことを知りたいとはまったく思わなかったし、海外へ行きたいなんて考

えてもみななかった。

私の世界を広げてくれたのは、高校生の時にアメリカから来たサリーというボランティア講師だった。最初は英語で外国人と話が通じたことに喜びを感じ、英語を更に好きになっただけだったが、授業以外でもいろいろな話をするうちに、それまでとはまったく違う常識を知らされた。一番印象深いのは政治への関心で、私は中国の若者は政府に不満を持っているが何も出来ないが無力感を示すと、なぜ行動もしていないのに文句ばかり言うのか、市長に手紙を書くのはどうだ、とか、サリーは半分怒りながら具体的な提案までしてくれた。政府が絶対的権威ではなく若者も自分の権力を主張すべきという考えを、私は初めて知った。

サリーとの出会いで、私は中国以外の世界を見てみると決めた。中国に一番近い日本のことを知りたいと思い、大学で日本語を専攻し、日本へ留学した。京都という憧れの地で2つの日本人ホストファミリーと出会い、着物や茶道など体験させてもらい、神社やお祭りを案内してもらった。留学生から社会人となった後も交流は続き、気づけば10年以上の付き合いで、結婚や出産など人生の大事な節目はいつもそばにいてくれる、本当の家族のような存在となった。異文化交流から始まった繋がりが、これほど幸せな絆へと変わった私は幸せ者だ。

日本は将来のグローバル人材を育成するために、2020年から本格的な英語教育改革に踏み切った。その内容からは、日本の未来を支える今の子どもたちに世界に目を向けさせる意図が窺える。しかし、現実には日本以外の世界に興味を持つきっかけがなければ、子どもも保護者も試験の点数にしか関心がない。私の母国と比べると教育資源分配の公平性に大きな問題がないように見える日本だが、子どもたちが身近で異文化交流をする機会は、地域によって大きな格差があると私は思う。

文化庁が京都に移転され、国際文化交流の振興という使命を担っている京都市に提案したい。それは京都市の異文化交流の輪を、他の市町村に広げることだ。

例えば、京都市の留学生と他の市町村の小中学生が交流できる場を設け、留学生は母国の文化や日本での体験談、地元の学生は日本の学校や文化を紹介するイベントを行う。私も昔、そのような交流活動に参加したことがある。日本に来て一番びっくりしたことは何かと聞かれ、定食屋で氷が入った水が出されたことだと答えると、「え〜！」と日本人中学生たちが仰天した。また、中国のことについてあれこれ聞かれたが、自信を持って答えられない質問が多かった。母国について実はあまり知らないことに気づかされ、母国の文化を見直す良いきっかけとなった。当時、留学生として、「講師」として台の上に立たせてもらったが、教えるよりも学んだことが多かった。そのような交流は、地元学生にとっても留学生にとっても、成長のチャンスになるに違いない。

今日も私の 4 歳の娘は、保育園の帰りに「世界は一つ、世界は同じ」と口ずさむ。彼女の知る「世界」は中国語を話す中国、英語を話すアメリカ、日本語を話す日本からなる、まだ「小さな世界」だ。娘を含めて、日本の子どもの世界が広がるように、身近にある異文化交流の環境が充実していくことを切に願う。